The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アフガニスタンのデザイン展望
Author(s)	小山, 喜平
Citation	デザイン理論. 1965, 4, p. 20-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52470
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アフガニスタンのデザイン展望

小　山　喜　平

1）歴史的背景

西アジアの内陸国アフガニスタンは、米国、ソ連の援助によって交通路、発電等の開発が行われ近代化へと歩み始めた。バザールと呼ばれる市場には欧米、中国、日本等の日常物資が多量に出まわり、例えばソ連製のジープ、マッチ、アメリカ製のタバコ、オランダのラジオ、チーズ、ドイツ製のガラス、中国製の緑茶、日本製の繊維、陶器、パキスタン製の布といった様に東西の物資がここにあり、現代版シルクロードの十字路と云った感がある。

激動する現代にあって、とかく認識の薄れがちなこの国も、歴史を振返ってみる時、多彩な足跡を残している事を知る。

アレキサンダー大王の東征によるアフガニスタン占領とその植民地建設は、ギリシヤ文化の開花をもたらした。

中国にあっては、漢代西方との交易が開けペルシヤの国との貿易が成立したのである。

次いで西アジアにサラセン帝国が出現して、次々に近接の地方がイスラム化して行った。アフガニスタンも、クタイバ、イブンムスリム将軍の頃（705年）、ホラサン地方もその勢力下に入った。

1218年モンゴルの王、ヂンギスカンはチヤガタイ、ジユチ、オゴタイの3人

の子に、大軍をひきいさせ西進せしめた。サラセンの諸都市は、疾風の如きモンゴルの大軍の前に滅亡して行った。其の名もチャガタイハン国となってモンゴル帝国の領土となる。

現在アフガニスタンの各地に、モンゴルの末裔ウズベク、トルコマン、ハザラ等の民族が住みついている。

モンゴル帝国の分裂後、パミールのドグルック、チムールが出現して、イスラム帝国の再建にとりかかった。アフガニスタンもその領土となり再びイスラム文化が栄えた。そして次のペルシヤ文化圏へと続いて行く事になる。

此の様にして、各時代に於ける国の政治が、文化に大きい影響を及ぼしている。

さて、此のような歴史的背景をみながら、この西アジアの十字路、アフガニスタンのデザインを考察してみよう。

2）建 築 の 装 飾

ペルシヤに於ける目覚ましい数学及び天文学の発達は、四角形、六角形、八角形のベースに円型ドームを持つ建物を造り出した。

日乾しレンガを積み上げて建物を造るのであるが方形のベースに円型ドームを積み上げて行く時、四方の角の接続部分は、レンガを少しずつ内側に出して、丁度蜂の巣の様な形体を生んで行く。モザイクタイルが発達してからは、各部の構造上から来る形体にたくみに幾何文を配して全体の調和をとっている。

装飾について観る場合、レンガによる積み上げの時の壁面装飾がある。レンガの積み上げの時、壁面に凹凸を作って、菱形、三角形、十字形の幾何文様を生み、装飾される。これ等の技法は民家の一部分、城門、寺院等によくみられるものである。

第二は壁面装飾に使用されるレンガを、特に文様形体にあわせて作り、焼成して建物の表面装飾に使用する場合がある。ガズニーの塔、ハザラジャトのミ

ホル、ジヤム、のミナーレット（塔）等がその例である。

第三はイスラム文化の影響により発達したモザイクタイルの様式である。現存するものもモザイクタイルの様式である。現存するものではチムール時代のバルフの学校の門、墓等があり、又、ヘラトにもある。イスラムの文様は、偶像崇拝を禁止する宗教上の影響から、幾何学文、草花文、それにコーラン（イスラムの教典）の一節が描かれている。特にペルシヤに比し、幾何学文の方が多い点がめだつ。

又タイルは多彩な中に配色に調和がとれ、全体として観る時、中間色の色彩が美しい。

建物全体をモザイクタイルで被ふ技法は、寺院、王宮、王族の墓、城門、塔等であって一般民家にはみられない。

3）焼物の装飾

焼物は大別して、花瓶、水壺、鉢等の陶器と建築のためのタイルである。

イスラム建築で代表されるモザイクタイルのためのタイルの生産は多い。

ここでは、一般日常生活器、装飾品としての陶器について考察してみよう。

先づ地域的にその作風をみる時、内容にかなりの変化がある。北部中央アジアの平原にある諸都市では草文をあしらった幾何文様のイスラム陶器がある。マンガンによる着色で紫色であるが、タシクルガン～アンホイ間の遺跡からの陶片によって分布を知る事が出来る。文様、技術の面から共通したものがみられるが、一部バルフのパラヒッサール（城）より、の採集品ではその他に黒釉緑釉、ペルシヤンブルー等があり、チムール時代のヘラト、バルフ、サマルカンドを結ぶ文化ラインの主要都市としての一面がうかがえる。

中部ヒンズークシ山脈の峡谷に開花したバーミヤンのシヤリ、ゴルゴラの遺跡から約10余種の技法を持った陶器類をみる事が出来た。これは、バーミヤン国として高度の文化を発達させた生活がうかがえる。しかし、このバーミヤン

の文化は、ヘラト、パーミヤン、カーブルを結ぶ中央コースでは他に共通したものをみる事が出来なかった。中央コースヒンズークシ山中のハザラジヤット地方は、ハザラと呼ばれるモンゴル系の民族が住み、織物のデザインは、モンゴル系である。

チヤクチヤラン附近の山中の砦から彩文土器が採集され、イスラム陶片は少なかった。彩文の技法、様式からインド、イスラム的なものであり、アフガニスタン中央部にあった。ゴーラッド、王朝の研究調査が今後進むにつれて歴史的、地理的な結びつきが明らかとなろう。

パーミヤンでは彩文の陶片はみられない。むしろ南部ガズニーとパーミヤンのイスラム陶器と共通した技法がみられた。

現在イスタリフ、ガズニー、クンズツの主な陶業地の他に各地で土地作りが多くみられる。イスタリフ、ガズニーは共に豊かな水にめぐまれた最良のオアシス都市である。焼物に適する陶土、それに燃料になる樹々が多い事も、又、恵まれた点である。

イスタリフは現在では白化粧した、器の上からペルシヤンブルーの低火度釉をかけて作っている。線彫り文様はそこに釉がたまって装飾性を増している。ガズニーでは二彩の陶器がみられる。ガズニー、イスタリフ等の釉薬を使用した陶器の他に諸都市での日常生活に使用せられている水壺、皿等が多量に生産されている事は先にものべた。この他に日本の技術援助によって、カーブル、クンズツに陶器工場が出来て、量産を開始している。

4）カーペットとギリム

人口約1380万人、その85％が農業及び牧蓄業である。遊牧の民にとって、羊等をおって移動し、天幕をはって生活する時、カーペットやギリム等の敷物は生活の大切な用具である。移動中のキヤラバンに接する時、ラクダの背にある大きな荷物の中で、これ等の敷物がすぐ眼にとまる。遊牧民にとっては移動し

て牧草地に入り一時期定住する時、又農民にあっては農閑期等に、女性はカーペットやギリムを織る。大きな都市のバザールで数多くみられるカーペット類も、大工場での生産ではなく、家内手仕事の場で作られたものが都市に集荷されたものである。したがってカーペット及び、ギリムは農村地帯や、遊牧民のキャンプで織られるので見聞する事は困難である。他人に対する警戒もさる事ながら、此等の仕事は全て女性の手によって織られるところに問題がある。イスラム圏では女性が他人の前に顔を出す事をつつしむからである。

アフガニスタンカーペットやギリムの主要産地は中央アジアにあるカレザール、カラボエン、シバルガン、アクチア、アンホイ、マイマナ、ドーラットバード、及びヘラト等が多い生産地である。

中でもドーラットバードは中心と云はれている。しかし先にものべた如く、家内生産のため、工場をみつける事は困難である。

ドーラットバード産の幾何文カーペットがアンホイ、マイマナ、ヘラト等に影響をあたえているところがこの地を中心と呼ぶのだろう。

カレザール、カラボエン等はトルコマンの人々によって織り出される黒と赤によるものでカーペットとして特色あるものである。

何れも下絵無しで記憶により織られる。

ギリムと呼ばれる敷物は単純で織物の技法を生かした楽しめる品が多い。昔は草木染による羊毛で織り出されたものであるが、近年では、化学染料に変ってきた。色彩感覚にも大きな変化が出て来た事は注目すべきである。

これらの敷物は乾燥した地帯にあって、地面に敷き、その上で生活するのであるが、湿気を持たない事は大きな得点と言はねばならない。

この他に技術をつかってラクダ、馬、ロバにつける袋類に需要がある。デザインはいずれも幾何文であるが、イラン方面の幾何文とは区別出来る作風である。

5) 金 属 器 類

西アジアから印度方面を旅行してバザールに足を入れた時、だれでも眼に入って来るのが真鍮、銅細工であろう。眼に入ると云うより耳に入って来ると云った方が良いかもしれない。バザール通りは職種別に通りが出来ているのが通例であるが、銅細工通りに近ずくと打出しの槌音が四方に響いている。

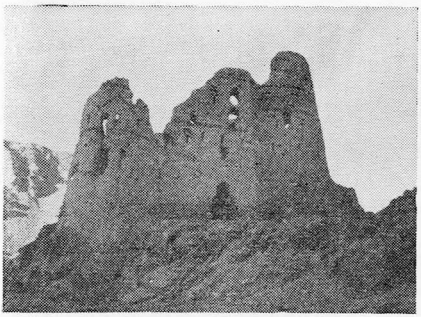
製品は打出し、文様彫り、錫メッキ等の工程によって一貫したものがみられる。上水壺（飲料用）、下水壺（便所用）、大鉢、鉢等生活必需品であるが、今も槌打ちの品々が店頭でみられるのは工業の発達した国ではもはや望めない事である。

古い器には、金銀象嵌をしたものも多く、カーブル博物館、マザリシヤリフ博物館、クンズツにあるスピンザールライブラリー等にある蔵品によって知る事が出来る。

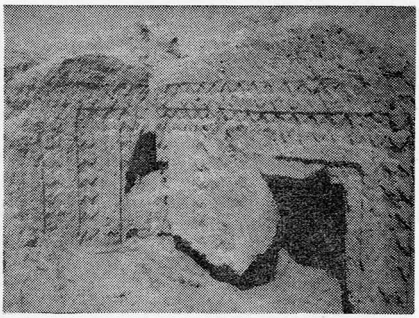
此等の品々も共通して幾何文、唐草文等がある。

以上大急ぎでアフガニスタンのデザインと背景をのぞいてみたが、手工芸が今後量産の問題をどの様にして扱って行くかによって大きな変化をもたらす事であろう。

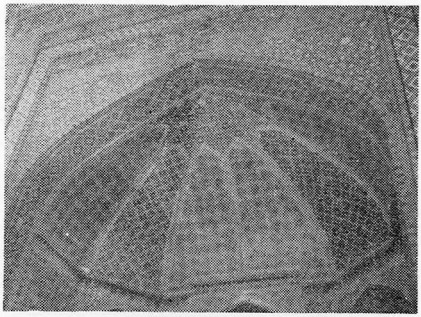
（註）西アジアの工芸技術について京大人文科学研究所の吉田光邦先生の報告書を参考にされたし。



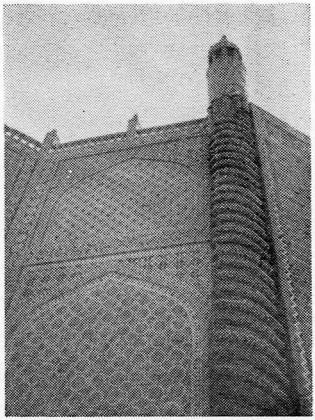
ドアブ〜ドシイ間にある
峡谷の砦　軍事上の建物
であるが装飾をのぞかせ
ている。



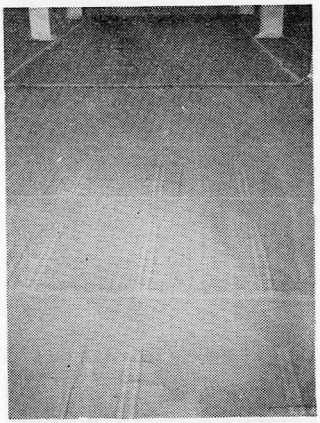
シユール、テペ附近の泥の廃屋
壁面の幾何文があり昔日の華麗
な面影をしのばせる。



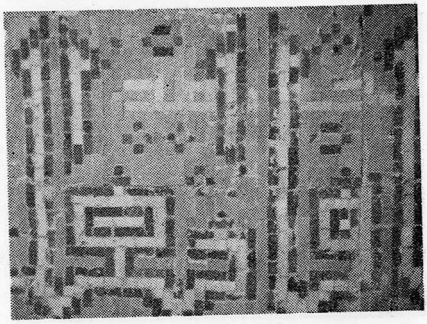
マザリシヤリフのモスク部分
現代も聖地として多くの信者
が詣る。建築の表面を被う多
彩なモザイクタイルは豪華そ
のものである。



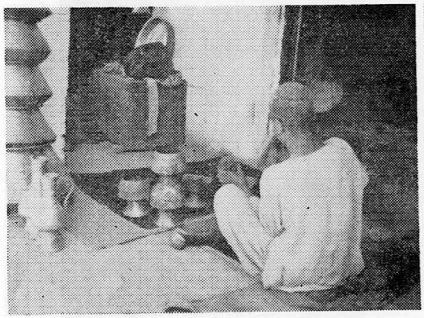
マザリシヤリフのモスク部分
幾何文と、アラビヤ文字で全
面をうめているが調利のとれ
た色彩である。



マザリシャリフのモスクの
中に敷かれたギリム。
家型のマスの中に一人づつ
座してお祈りをする。

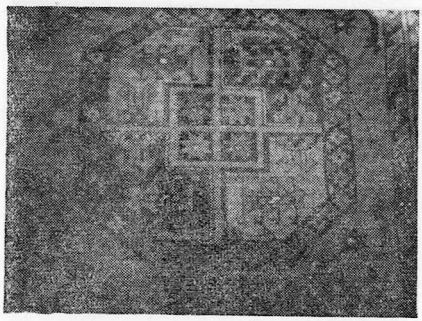


（バルフのモスク）モザイクタイル
巨大なドームの壁面の一部



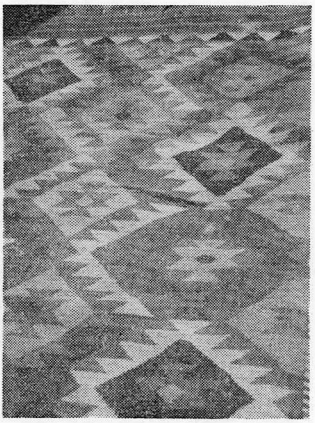
中央アジアクンズツのバザールでの
風景
銅細工師は木槌ををふりあげ黙々と
仕事にはげむ金属音だけが四方にひ
ろがる。

クンズツにあるスピンザールライブ
ラリーの蔵品



アンホイ産のカーペット
ペルシヤカーペット文様の
点で異なる

左と同じアンホイ産
カーペット



羊毛を草木染にし着色して
織上げた敷物、トルコマン
のギリム

ペルシヤンブルーの鮮かな
色彩が店に一ぱい　イス
タリフのバザールでの光景